

---

# 姫の気まぐれ

水銀。杏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姫の氣まぐれ

### 【Zコード】

Z2488Z

### 【作者名】

水銀。杏

### 【あらすじ】

天皇の娘の暗殺を命じられた執事。だが殺せない。理由はただ一つ。（過去に連載して消した作品のリメイクです）

## プロローグ（前書き）

あらすじにも書いたように、これはリメイクしたものです。  
詳しくは後書きに書きますので、『プロローグ』をどうぞ。

## プロローグ

俺の前に出されたのは、一人の少女の写真。

作り笑いのような表情で、人をバカにしているようだ。

「知ってるよな？天皇の一人娘だ」

ボスは小型の拳銃と、弾が3つを俺にくれた。

「これで、この娘を殺してこい」

それが俺の命令。

暗殺でも、近づいて殺してもいい。

日本国民はこの娘にうんざりしていた。

15歳になるのに、まともな躾はされておらず、

国宝を拝見するときにも常に騒いだり、暴言を吐いたり、

顔とのギャップが激しい生意気な小娘だった。

天皇も天皇で、注意することなく笑っており、後に謝罪することもない。

かといって、この娘が死んだところで日本が変化するわけでもないのは確か。

この出来事で、天皇一族が崩壊すればいいのだ。

俺はボスに拾われた身。命令は必ず実行する。

「もし接近するなら、コイツに頼め」

メモ用紙に携帯番号。

現在天皇のところで護衛をやつてる仲間だ。

数回会つたことがあるか、助けになるかも知れない。

俺は娘に近づきこにした。

銃で撃つなど、バレるようなことはしたくない。

寝ているところを狙つてやろう。その方が楽な気がする。

「もしもし…ボスから頼まれたんだが

」

数日後

俺は上手く接近することが出来た。それは、  
「今日からお嬢様の執事を務めさせてもらいます。…モカと申します」

執事。性に合わないとthoughtたが、天皇が勝手に抜擢した。  
黒いスーツを着て、この娘の世話をする事になつた俺。モカは適  
当に決めた名だ。

「変わった名前ね。…私は、澪よ。

“姫”って呼んでちょうだい

「…かしこまりました。姫」

これが、俺と姫との出会いだった。

## プロローグ（後書き）

次話 11日（21時）  
誤字・感想等受け付けます。

1話は明日ですが、それ以降は3日おきぐらいになると感じます。  
R15ということ、21時投稿で行きます。

## 1・私を敬いなさい（前書き）

一話目スタートです。

あ、完璧に女性向けの作品です。

## 1・私を敬いなさい

15歳の姫

21歳の執事

部屋でずっと一人つきり

「モ力、お腹が空いたから何か持つてきて」

「はい」

基本的にベッドの上で過ごす姫。

学校に行く時間なのに、服に着替えようともしない。  
ピンクのフリルのネグリジェが可愛らしいが、数日間も見てるとい  
い加減飽きる。

よそから見たら、美形なお嬢様だが……。

「サンドイッチです」

「置いといてー」

俺を見ようともしない。近くにあるテーブルを指差し、読書を始め  
た。

テーブルにサンドイッチを置き、その側で立つ。

執事の仕事は面倒だが、休憩が多いバイトみたいな感じだ。  
食事や掃除の時間以外は、こうして立ってるだけでいい。  
姫からの命令があるまでは。

「父上様があつしゃつてましたよ。学校に行かないのかと……」

「モ力は私だけの執事でしょ？私の言うことだけ聞けばいいの」  
突然俺に話しかけられた衝動で、サンドイッチを頬張る。

「モ力が来る前に、年配の執事がきたわ」

食後の紅茶を飲みながら、姫は続けた。

「身の回りのことは言わなくても全部してくれたわ。  
でも、ものすごくしつこかつた。家の財産とか聞いてきて……」

「…」

「知らないって言つても聞いてきたの。だから辞めさせたわ」「そんなことが…」

カップが空になると、紅茶を注ぐ。

「モ力も聞いてきたら、…」

「姫が嫌がることは聞きませんよ」

「…そう」

紅茶を一口飲むと、姫が俺にアイコンタクトをする。もういらないっていう合図だ。

トレイ」と部屋から出す。再び部屋に戻ると、姫はまたベッドの上で横になっていた。

「なんで執事になつたの? 金田当て?」

「…私は金で雇われたわけではありません。」

ただ姫の守るために…」

「悪趣味」

「なんとでも」

笑いながら姫が俺に枕を投げる。

それを受け取ると、元の位置に戻す。

自動的に、姫の顔が俺に近づく。

「もし立場が逆だったら、襲つてたわよ?」

「そうですね」

お互い口だけ笑うと、唇を重ねる。

別に恋仲になつたわけじゃない。

姫は気にいつた人にキスをするらしい。まあ、俺が初めてみたいだが。

すぐ殺せる。

いつでも殺せる。

俺の頭の中では、それを抑えるので精一杯だった。

1・私を敬いなさい（後書き）

次話 14日（21時）  
誤字・感想等受け付けます。

## 2・私の「いつ」ことだけでいいの（前書き）

「いつ」！

## 2・私の言ひ方だけでいいの

「モ力君、澪に学校に行くよりは言ひたくないか?」「最善を以くしておりますが…」

「せめて勉強はしてくれればいい。…では、頼むぞ」「こつてらつしゃこませ」

姫のお父様である、天皇陛下。

今日から一週間、アメリカの皇太子への挨拶、王室の訪問をするらしい。

見送ると、誰かに呼ばれてるよつた気がした。

「遅い!」

「申し訳ありません」

俺の勘は当たつていた。

ベッドの上で横になりながら足をバタつかせ、俺の事を睨みつける。

「お父さん、なんか言つてた?」

「…学校には行きたくないですよね?」

「うん」

即答で返す姫。

用意しておいた朝食はもう食べ終わつていて、特にやる事がないのか、

ネグリジエのままで起き上がりうとしない。

机に置いてある教科書も、読むどころか見ることなく…。

陛下が困るのも分かるが、甘やかしたのはそつちだと思つんだが。

「モ力は私の執事だから、お父さんと話す必要ないわ。

この部屋から出なくともいいし

「縛られるのは嫌いですよ?」

「…私の執事になる条件よ?」

俺が姫が寝ている横に座ると、少しだけ嬉しそうな顔をした。

「なんで学校が嫌なんですか？友達がいるでしょう？」

「友達はない。周りに男子が寄ってきて気持ち悪いの」  
姫が通っている学校は、大手会社の跡継ぎや令嬢などの集まりだ。  
もちろんのこと、姫と結ばれた男子は天皇一族の仲間入り。  
自然と注目的になるのは仕方ないことだが。

「無礼な奴は懲らしめないとですね」

「モ力が同級生だったらしいのになー」

「モ力は勉強できるの？」

「ある程度のことしか…」

モ力は捨て子であり、まともに義務教育を受けていない。  
人殺しの世界に入った時に少しだけ勉強したぐらいだ。

「一緒に勉強する？」

「したら、学校に行つてくれます？」

「それとは別。私が何もしなかったら、モ力の評価が下がるでしょ？」  
学校は、モ力も行ってくれるなら行くわ

姫の腕を引っ張り、体を起させる。

俺が触れると、姫は何故か素直に言つことを聞いてくれる姫。  
自然と俺の胸元に姫の顔を当たる。

「モ力の口々は温かいから好き」

「はい」

「一週間勉強してやりましょ？お父さんを見返すの」

「はい」

俺は姫の頭を撫で、見えないよう面倒臭そうな顔をした。

## 2・私の言つことだけでいいの（後書き）

次話 16日（21時）  
誤字・感想等受け付けます。

### 3・私はあなたが嫌い（前書き）

そろそろ1-5禁の内容を出せたらいいのになー

### 3・私はあなたが嫌い

「勝手に部屋に入らないでよ。」

「ですが澪様、陛下に頼まれてまして…」

掃除をしようと部屋に入ってきたメイドを怒る姫。

「掃除ぐらごモカがやつてくれるわ…どうか行つて…」

はあ…

「澪様！何をするんですか！？」

バイオリンのレッスン中、いきなり『』を床に叩きつける姫。

「つまらないの…もつやらない…」

「陛下が…」

「バイオリンも華道も茶道も、モカが一緒にやつてくれないなら、  
私やらない！」

いやいやいや

「なんで一緒に洗濯するのよ…別にしてつて言つたでしょ？」「申し訳ありません！私のミスです…」

陛下の服と一緒に自分の服も洗濯され、お怒りの姫。

「あんたみたいなバカメイドじゃなくて、モカがつ」

「分かりましたから姫、部屋に戻りましょ」

これ以上メイドたちが怒られるのを見でられない俺は、姫を背負い、  
部屋に戻す。

基本姫が家中を移動するときは、俺がおんぶする感じになつてい  
る。

「すみません、モカさん」

「いえ、他の業務をよろしくお願ひします」

部屋に着くと、ベッドに飛び込む姫。

「さて、勉強しましょうか?」

「モ力も一緒に?」

「先に洗濯を済ませてきますね」

「帰つてくるまでやらないわよ?」

「…結構です」

部屋を出ると、一気に疲れが出た。

今、陛下はアメリカに行っているが、姫を心配する電話が頻繁に掛かってくる。

何をしているんだ?とか、勉強はちゃんとしているのか?とか…。過保護というか、全てをメイドや俺にまかせないでほしい。自分の娘ぐらい、自分で面倒を見たらどうなんだ?

部屋に戻り、姫の命令で勉強を付き合つこと。

「モ力、この問題にはこの数式を使うのよ」

「姫は頭が冴えていますね」

「当たり前よ」

俺がいるだけで、姫の勉強がはかどる。

この数日で、学校から出された宿題が終わりそうだった。

「姫、この調子で終わらせましょう」

「…なんか」褒美くれる?」

「?」

「覚悟しといてね」

姫は俺に笑いかけると、宿題を続けた。

3・私はあなたが嫌い（後書き）

次話 18日（21時）  
誤字・感想等受け付けます。

#### 4・私が一番でしょ？（前書き）

ヒロコ・シーンが書けたらいいのになー（遠い目）

## 4・私が一番でしょ？

姫は俺の事が好きなのかもしれない。  
そう理解した。

宿題が終わつたらのじ褒美は、俺と関係を持つということ。

やうに、そんなじつせう法度だ。

陛下やこの屋敷にいる人にはいもんにバレたら、完璧にクビになる

しかも、俺は姫を殺すために忍び込んでいた身なのに……。

「モカが私のことを全部やつてくれれば、メイドは部屋に入つてこない。」

「ずつと二人つきりになれるわ」

「そんなに私のことが好きなんですね？」

「うん。執事として」

いきなり抱きしめられても、俺にしては慣れきったことだ。  
不意にしてくるキスも。

「モカ、明日になつたらお父さんが帰つてくるから、今日は一緒に寝ましょ？」

「一氣田中」

「田中さん、おはようございます。」

〔二〕

「うん」

体の関係も。

過去に他の人殺し一家に潜りこんだ時、そいつらに監禁されてた女を抱いたことがある。

好意でじやない。頼まれたから抱いた。嫌で仕方なかつた。なのに、姫のことは好きというわけでもないのに、別に嫌ではない。心なしか喜んでいる俺がいた。

夜、姫が眠りに就くと部屋を出た。

ボスから電話が入つていたのだ。

「なんでしょうか？」

『まだ殺すことはできないのか？』

ボスの声は冷静だが、怒りがこもつている気がした。

「やつと俺に懐いてきたんです。殺すのは時間の問題です」

ボスは小さく息を吐くと、電話を切つた。

自分の部屋に行く通路で、

「…結城さん」

同じ人殺しである、先輩の結城さんに会つた。

今は護衛をしているが、本当は姫を殺すように頼まれた方だ。

姫に気にいつてもらえず、入つたその日に執事から護衛になつた。常に悪人面で、他の護衛やメイドから恐れられている。

「お嬢様は優しいか？」

「ええ、毎日ハードで」

「ここで話すのもアレだからな、部屋に行くぞ」

場所を俺の部屋に移した。

「陛下はお前以外の執事を雇う気はないようだ」

「…」

「殺すなら早く殺せ。いい加減にやつて途中で投げらざれても困る」

結城さんは俺に銃口を向けた。

俺が姫を殺すことが出来なかつたら、この人が代わりに殺すんだろうな。

「俺が執事を辞めるつて言つたら、姫は柱にでも俺を縛りつけるでしょうね」

「相当惚れられてるんだな、お前は」

「束縛されるのは嫌ですけどね」

#### 4・私が一番でしょ？（後書き）

次話 20日（21時）

誤字・感想等受け付けます。

23・24・25日は更新を休みます。

## 5・私の虜（前書き）

某ドラマの名残りで、  
モ力のモデルは向井理君でお願いします

陛下が帰つてきてから、余計俺に懐いてきた。だが、今日は珍しく、

「姫、学校に行かれるのですか？」

「そうよ、モ力送つてくれる?」

久しぶりに姫の制服姿を見た。

授業を受けに行くのではなく、宿題を出しに行くだけらしいが。

「行つてきますのチューは?」

「さつきしました」

「あれは、おはようのチューでしょ?」

姫を学校まで送ると、戻るまで裏門で待つことにした。

しかし、宿題を出すというだけなのに、小1時間待たされた。

姫は家に帰るなり、陛下の部屋へ行つた。

入室は許されず、姫の部屋で待機することに。

数分後…。姫は部屋に戻り、ソファーアに座る。

「何の話をされてたんですか?」

「んーと、私ね、婚約者がいるんだって」

俺は目を丸くして驚いた。

姫が学校に行つてない間、陛下と学校側で勝手に決めたらしく。

お相手は大手財閥の御曹司であり、姫と同じクラスの方で、

学力もトップをキープし、容姿も申し分ないとか。

姫がなかなか戻つてこなかつたのは、そのお相手と話をしたようだ。

「なんかね、あつちは私と結婚してもいいんだって

「そうですか……!」

軽く流すと、姫がクッショーンを投げてきた。

「なんとも思わないの?彼女が他の男と結婚しようとしてるのに?」

「仮に付き合っていたとしても、私は姫の婚約者じゃありませんよ？」

視界に入つてくる涙目が、憎らしく思つ。

自分に当たつたクッショնを元の位置に戻すと、姫は俺の腕を掴む。

「キスしたら恋人ですか？体を重ねたら結婚できますか？」

「…」

「お互いが望まない限り、妄想のままです

「……よくわからない」

姫に腕を引っ張られ、横に座る形になつた。

「モ力が、私を好きになつてくれるまで待つわ。

だから、お父さんに今回の話は無しつて伝えてきて

「そういうのは姫が直接言つものだと思いますが？」

「だったら、私たちが付き合つてゐつて言つわよ？」

「…一度手間ですね」

立ちあがり、部屋を出る。姫もついてきた。

陛下の部屋は、姫の部屋がある屋敷から離れており、そこまでの通路は基本的にメイドと俺しか通らない。姫は誰もいないことを確認し、俺と腕を組んできた。目が合い、微笑みかけてくる。

「私の言つこと聞いてくれれば良いんだけど…」

「…姫」

「ん？」

「いつか私にも、姫を惜しむ時がくると思つます

「…？。ありがと」

俺に、人を愛する気持ちがあれば。

## 5・私の虜（後書き）

次話 22日（21時）  
誤字・感想等受け付けます。

## 6・私だけを見て？（前書き）

姫はスケスケのパンツを履いてます。モ力君のために。

## 6・私だけを見て？

姫の婚約話は破棄されたが、毎日学校に行くようついでに説得された。それだけでは嫌なのか、俺も一緒に学校に行くといつ条件で承諾した。

「朝ですよ、姫」

「んー」

「学校に行くんでしょう？」

「あと5分…」

「じゃあ5分後に起こしますね」

…姫が簡単に起きてくれるはずもなく、

「もう昼ですよ」

「…」

もう正午を過ぎていた。

結局この日は学校を休み、昼食を食べた。

姫は出された宿題をやることになり、

俺は姫が着ていたネグリジェを洗濯しに部屋を出た。

数分後、部屋に戻ろうとすると、ドアの前が騒がしかつた。

「何様なの？私はモ力以外が淹れたお茶は飲まないって言つてるでしょ？」

「あの…陛下のお土産ということです…」

「余計いらないわ！どつかつて！」

姫とメイドが喧嘩をしていた。

ドアを閉められ、立ちつくすメイド。見たことない顔だ…新人か？

「すみません…姫が何かしましたか？」

「いえ、大丈夫です」

俺の顔を見ることなく、そのメイドを去つて行つた。

部屋に入ると、不貞腐れながら勉強を続ける姫。

「すぐにメイドをいじめるのをやめてください」

「モ力が遅いのが悪いのよ」

お茶を淹れ、姫の宿題に付き合つ。最中に、結城さんからメールがきた。

内容は『お嬢様が寝たら部屋に来い』……。

「遅かったな」

「姫の夜の相手もしなくちゃいけないんでね」

「まあ、座れよ。もうすぐ客人が来るからな」

ソファーに座ると同時に、ドアが開いた。

「あ

入ってきたのは、昼間のメイドだった。俺を睨み、真向かいのソファーに座る。

「モ力さんのことばはボスから聞いてます

「…あなたは、仲間ですか？」

「ええ

「モ力、この女の名前は島田。

陛下を殺すようにボスから頼まれた殺し屋だ」

「…? ?」

島田はまだ仕事があるらしく、早々に部屋を出て行った。

それからは結城さんから聞いた話。

あいつは俺と一緒に、ボスに拾われた身であり、命令にも忠実に答える女であった。

年齢は俺と変わらず、正直、顔とスタイルは完璧だ。

そのこともあってか、男性をターゲットにすることが多かつたらしい。

そして、衝撃なことを聞いてしまった。

「島田って女、自分が殺す男に恋しちまってな、孕みやがった。んで、自分の腹を切つて赤ちゃんを殺したんだ」

何故か俺は、子を孕む姫を想像してしまった。

## 6・私だけを見て？（後書き）

次話 26日（21時）  
誤字・感想等受け付けます。

## 7・私は誰よつも素敵（前書き）

ドロドロしたのが書きたいですね。  
後書きこじょっとした予告があります。

## 7・私は誰よりも素敵

「島田は自分の子を殺したんだ。人を殺すのに罪悪感なんてない。陛下が殺されるのも時間の問題かもな」

話が終わり、自分の部屋に帰る。シャワーを浴び、身をベッドに預けた。

島田の過去を聞いて、萎えるほどのదるさを覚えた。

ターゲットと殺し屋が結ばれる訳がない。

ボスにそのことがバレたら、中絶するなどの処置を行うしかない。

中絶しなかつたってことは、ある程度子は育つてたのだろう。

そして自分の腹を切つた。大量出血でもして、手術はしたはずだ。

島田はもう孕む体じやないな… そういうのって女はどんな気持ちなんだ?

姫がもし俺と…。

### 次の日の朝

姫を学校に送り、俺は用意された別室に行く。

授業に参加できない俺は、この部屋で待機することになる。

休み時間になると姫がやつてくる仕組みだ。

授業終了のチャイムが鳴つたと同時に、

「モカー」

姫が入ってきた。

「ん…ふつ」

両手で俺の頬を包み、キスをする。

「授業は面倒だわ。モカがやればいいのに」

そう言いながら俺のネクタイを解いた。

「…姫、休み時間は10分しかありませんよ?」

「10分もあるじゃない?」

誘いに断ることも出来ず、

俺が姫の腰を引き寄せようとした時、

「澪様！次は移動教室なので……？」

「きやつ！」

次の授業の担当の先生がドアを開けた。

先生は唖然としていたが、姫は何事もなく教室を出る。

俺はネクタイを絞め直し、気だるさを実感した。

6時間目の授業が始まるチャイムが響く。  
これが終われば帰れるのだが……。携帯が鳴った。

「……もしもし？」

『モ力か？今どこにいる？』

結城さんだ。焦っているようだ……。

『陛下が……倒れた！』

「……」

俺は車を出し、屋敷へと向かう。

門には救急車が停まっており、  
陛下が運ばれていくのが分かつた。

遠くにいる結城さんを見つける。

「何があつたんですか？」

「お茶飲んでるときにいきなり倒れてな……まだ意識はある」

「まさか、島田のせいですか？」

「いや、あいつは非番だ」

結城さんは俺に1枚の写真を見せる。

ちょっと古い写真だが、俺と同じ歳ぐらいの男が写っていて、  
礼儀正しくスーツを着こなし、にこやかに笑っている。

「こいつは6年前、お嬢様の執事をしていたやつだ。

今日から補助の執事として、朝来たんだが……。怪しいと思わないか  
？」

## 7・私は誰よりも素敵（後書き）

次話 28日（21時）

誤字・感想等受け付けます。

8話にて、今年の投稿をストップします。  
& 28日～31日のどつかで、  
番外編（多分工口くなるよ）を投稿します。  
詳しくは次話に書きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2488z/>

---

姫の気まぐれ

2011年12月26日21時59分発行